

## 破壊ではなく建設を

今年もまた原爆の日がきた。長崎で生まれた私は毎年の夏、この日に家族で黙祷をしながら育ってきた。想像を絶する悲惨な歴史ではあるが、不思議に長崎の街も人々もそれだけに拘泥することなく、明るく素敵な文化を作ってきた。古くからさまざまな異国の文化を受け入れ、独自の和洋折衷なエキゾティズムを生み出してきた歴史のせいだろうか。まさに多文化共生の街である。だが、本当の多文化共生とははたしてどんな世界を指すのだろうか。

私は昨年フランス、ル・アーブルの高校に短期留学をした。私はそこで議論することの圧倒的な力を感じた。毎週、政治や社会、法律などについて討論する授業があったが、テーマは多岐に渡っており、先生の質問が終わるや否や、どの生徒も次々に手を挙げて自分の意見を堂々と述べるのだ。そこには日本人学生にありがちな躊躇や忸度など微塵もなかった。驚いた私は彼らに聞いてみた。「あなたたちって家でも友人とでも普通に政治の話をするの?」と。すかさず返ってきたのは「Oui, oui, ! Bien sur!」という反応。そして「え?日本人は話さないの?じゃあ、どうやって国を作っているの?」と聞き返される始末だった。「え?私たちが国を作る?」と私はこの言葉に衝撃を受けた。

ここで私の頭には、前から気になっていたひとつの問題が浮かんだ。憲法改正の問題だ。私はやはり幼いときから「日本は憲法で平和を守られている」と疑いもしなかった。ところが近年、「自国の防衛を自国で行うのはしごく当然」「いつまでもアメリカから押し付けられた憲法をありがたがっていないで、時代に即すように変更すべき」といったさまざまな意見を耳にするようになった。そしてそれは戦争を経験していない、国際化を標榜する我々若者世代からの意見が少なくないというのだ。実際に世論調査でも、憲法改正にどちらともいえないという18~20代の若者は実に59%にも上ったという。

私は夏に帰省した折、一昨年前に亡くなった祖父の書斎を探ってみた。そして祖父自身が書いた「憲法解釈をときの内閣で変更してはならない」というエッセイと数冊の関連する書籍を見つけ出した。私はそれらを東京へ持ち帰り、このひと夏自分なりに読み解こうと試みた。そしてそれらを読むにつれ、今の私たちの置かれている時代の危うさを感じ始めた。

戦前の時代と今まさに令和を迎えた新しい時代、80年もの隔たりがあるのに、なにか似てはいないか。それは人々が大多数の意見、情報に流されているという点だ。私たちは今溢れるほどの情報を自由に得ることができる。だがそれは諸刃の剣でもある。多様性の時代と言いながら、SNSでもニュースでもひとつの意見に皆が同調し、結局は均一性の中に安住しているように私には感じられる。私は今まさに部活やボランティア団体の活動の中でこのことにもがいている。もっと良くしたいという意見を言うことで、少なからず

友人との間に軋轢が生まれることがある。食い違う意見の人と対立することを恐れて、すべてやめてしまいたいと思うことも正直あった。へそを曲げて話し合いに来なくなった友人もいたが、賛同して協力してくれる仲間もいた。そして少しずつではあるが、私たちの活動は変わりつつある。自分の意見を主張するだけでなく、相手の意見を徹底的に聴き、歩み寄り、ひとつの答えを探していく感激はひとしおだと気づいた。

フランスで粉々にひびを入れられたショーウィンドウに驚き、「ジレジヨヌ（註：「黄色いベスト Gilets jaunes」フランスで2018年11月から発生している政府への抗議活動）は、ここまでして自分の意見を訴えようとしているの？」と問う私に、フランス人の友人が答えてくれた言葉が忘れられない。「破壊と主張は違う。」と。

祖父の蔵書の中に見つけた加藤周一氏の一文は私に勇気を与えてくれる。

「獲得すること、建設することは、喪失すること、破壊することよりもむずかしい。（中略）生きている限り、大切なのは建設することで、破壊することではないだろう。」

そうだ、私たちに求められているのはまさにここだ。

だから恐れずに主張し、どんどん対話していこうと思う。外国語を学ぶのはそのためだ。答えの一つではない世界で、分かり合うことを諦めず、意見を出し合うことをむしろ楽しむこと、それが私たちの未来に課されているミッションだ。

100年以上も昔、日本が日露戦争で浮かれていた時代に、夏目漱石は著書「三四郎」の中で「このままでは日本は亡びるね。」と書いている。

いくら文明が発達しても、自国を尊重するばかりでなく他国をも尊重できる人間に育つこと、これがまさに私たちに送られているメッセージだと思う。

私が令和に期すること、それは先人の叡智を破壊することなく、その上に新しい未来を建設していくことだ。